

朽尾武先生を送るの序

夫れ偏は偏に通ず。偏も多きに亘れば自づから偏ならざるか。中庸鮮いこと久しと嘆きし夫子の、かへりて狂狷を好むはまた、偏の偏たるべきを心得てのことか。或道士の曰く、重箱の隅を丁丁啄撃、小穴穿てば広大無辺の宇宙見えん、と。これなん偏にして偏、無にして有、無極にして太極の骨法なるべし。

朽尾武先生、和漢の典籍に通じて博洽綿密、藏儲五車を連ぬることつとに名あり。加ふるに好むところ植物、動物、書画、音楽等々枚挙に遑あらず。その一々を究めんとして行動頗る俊敏、時に珍獸金絲猴を追ひて雲南の辺地に至り、時に円位上人の硯を探りて二見浦の勝景に逍遙す。書はその走筆の華麗日域を越え、彫蟲の鑿は蠟石鷄血より竹根陶器に振つて精なり。しかして先生の性、寛厚柔和にして諸才の圭角を見せず、むしろ愚者の風を伴る。すすんで実務を疎んじ、會議にては低睡を専らとするも、稀に発言稠広座中に虚を突けり。然るに講義への執心また人後に落ちず、全て手書精写の教材は機械第一の時勢に抗ふと見ゆるも、旁がた電腦電網進みて取るは善謔といふべきか。その温顔微笑は善惡貴賤を越えてなべての者を誘引許容するかのごとし。午餐時、若輩徳を慕ひて座談を聴かんと集ひ、教場にては、学生等トツチー／＼と呼びて狎る。ここに知る、学に同じく、人性の偏また必ずしも偏ならざることを。近年大患数度、幽明往来する毎に蘇生復活す。俗にいふ不死身なるに等しく、ここに於てか臥病すなはち壮健、死す

なはち生といへば漆園のわりなき寓言に似たるも、これまた無極にして太極の真境ならん。今茲先生、古稀にあたりて成城大学三十年の講筵を徹し、まさに相洲上宮の里に幽棲せんとす。業を受けし者はもとより、我等同僚ひとしくその退隱を惜しむに堪へず。後進僭踰ながらここに送序を作り、いささかその高德面貌を伝へて久寿を願ふのみ。

平成十九年三月吉日

後学 宮崎修多謹誌